

# テレビ討論番組における文体切り替えの効果

「ポライトネス」の観点から

大塚容子

## Effects of Change in Speech Style in TV Debates In Terms of Politeness Theory

Yoko Otsuka

### Abstract

The objective of this paper is to find the answers to the following questions: 1 )which speech style they use in TV debates 2 )when they change their speech style, if they do, and 3 )what the effects of change in speech style are.

The two kinds of TV debates were transcribed, and their utterances were analyzed in terms of Brown & Levinson (1987)'s Politeness Theory and Usami (2001, 2002)'s Discourse Politeness Theory. We show that in one TV debate, their choice of speech style is varied and their speech style is changed according to the content of their utterance. As a result, it is suggested that what they really want to say is talked with the plain form, and general information is conveyed with the polite form.

### Key words

speech style, discourse politeness, power, relation, debate

### はじめに

日本語には丁寧体と普通体という2種類の文体 (speech style)<sup>1)</sup>が存在する。発話を行うときには、自分の発話を丁寧体で行うか、普通体で行うかをまず決定しなければならない。話し手と聞き手との人間関係、発話の内容、状況などによってどちらかの形式を選択する(南(1987))。目上の話題の人物に対して敬語を使用しなくても発話は成立するのに対し、文体の選択は発話をする以上、必ずどちらかを選択しなければならない、その意味で義務的である。このような普通体と丁寧体の使い分けを敬語の一部と捉える立場もあるが、本稿では文体の使い分けを敬語と独立した問題として捉える。

テレビ討論番組は、特定の個人ではなく、一般視聴者に向けて放映される公的なものであり、そこで語られる内容は政治・経済問題であるため、あらたまった場面であると考えられる。したがって、そこで使用される文体は丁寧体であるかのように思われるが、実際に使用される文体を調べてみると、丁寧体だけではなく、普通体も用いられている。このような討論番組における文体の混在は何を意味するのであろうか、また、文体の切り替えにはどのような効果があるのだろうか。

本稿では、文体切り替えの効果をポライトネスの観点から考察する。まず、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論と、それに基づく宇佐美 (2001) のディスコース・ポライトネスの考え方を概説する。次に、実際の2種類のテレビ討論番組における発話の実態を見る。そして、ディスコース・ポライトネスの観点から文体切り替えの効果を分析する。

## 1. ポライトネス

### 1. 1. Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論

ここで扱うポライトネスとは、「人間関係を維持するための社会的言語行動」(生田1997: 66)のことである。したがって、日本語の敬語や丁寧表現などは、ポライトネスの一部に含まれるが、直接それを意味しない。Brown & Levinson (1987) は「フェイス」(face) という概念を使ってポライトネス理論を展開した。彼らのいう「フェイス」とは、人間一人一人が主張したい社会的な自己イメージのことで、「ネガティブ・フェイス」(negative face) と「ポジティブ・フェイス」(positive face) という二つの面をもつ。「ネガティブ・フェイス」とは他人の行動に邪魔されたくないという願望、「ポジティブ・フェイス」とは人からよく思われたいという願望のことである。そして、これらの「フェイス」を傷つける恐れのある行動を「フェイス威嚇行動」(Face-Threatening Acts, 以下FTAと略記)と呼ぶ。円満な人間関係を維持し、コミュニケーションを円滑に行うためには、「フェイス威嚇行動」を行わないという方法を選択するか、あるいはその程度を弱めるようなさまざまなポライトネス・ストラテジーを採用するというのが彼らの中心的な考え方である。

### 1. 2. 宇佐美 (2001) のディスコース・ポライトネス理論構想

宇佐美 (2001) は Brown & Levinson (前掲書) が示したポライトネスとポライトネス・ストラテジーを明確に分けることの重要性を説いた。すなわち、「円滑な人間関係を保つためのストラテジーとしての『ポライトネス』への欲求・動機」(宇佐美2003: 120)は普遍的なものであるが、FTAの度合いを和らげるために採用されるポライトネス・ストラテジーは個別言語によって異なるという立場を明確にした。そのうえで、談話<sup>2)</sup>そのものを対象にしたポライトネス理論、すなわち「ディスコース・ポライトネス理論」を展開した。その理論のなかで、特に本稿の分析に必要な概念は、基本状態、無標ポライトネス、有標ポライトネスである。

宇佐美 (2001) によれば、まず、ある談話のディスコース・ポライトネスの基本状態を同定する必要がある。文体を例にとると、例えば、討論という一つの談話のなかで使われた丁寧体の使用率が50%を越えていれば、丁寧体が無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の基本状態であるということになる。この談話における丁寧体の使用が無標であるということは、丁寧体を使用することが話し手と聞き手との人間関係、場面のあらたまり度等の条件から考えて当然期待される行動であって、決してそれはポライトではないということである。この基本状態から逸脱すること、つまり普通体を使用することは有標行動となり、談話において特別な効果を生むことになる。そして、有標行動の効果として、プラス・ポライトネス効果、マイナス・ポライトネス効果、言語的談話効果を挙げている。前者2種類の効果は有標ポライトネスである。プラス・ポライトネス効果は相手の「フェイス」を守り、好印象を与えることになり、マイナス・ポライトネス効果はそれが意図的であるか非意図的であるかに関係なく、相手の「フェイス」を傷つけることになる。言語的談話効果は、話題の転換などを標示するもので、無標ポライトネス

である。これが「ディスコース・ポライトネス理論」の概略である。

本稿では、このようなディスコース・ポライトネスという観点から、テレビ討論番組における文体切り替えの実態を調査し、その効果を分析する。

## 2. 調査

### 2.1. データ

以下の2種類のテレビ討論番組を録画し、その音声文字化したものが談話基礎資料である。

#### (1) 談話資料

資料A：サンデープロジェクト(テレビ朝日,1998年8月9日放映)

資料B：日曜討論(NHK,2003年8月17日放映)

資料Aの出席者は、司会者1名、与党議員3名、野党議員4名、テーマは当時の首相(小渕恵三氏)の所信表明演説の内容についてである。司会者(田原氏)の過激な発言でよく知られている番組である。資料Bは、司会者1名、出席者5名、テーマは「待ったなし 年金改革をどうする」で、主に厚生労働大臣に年金改革の進め方についての意見を聞きながら、出席者がそれぞれの立場で意見を述べるというものである。

話しことばが分析対象であるため、文字化にあたり、宇佐美(1987)の「発話文」という概念を導入する。一語文、述部が省略されているような中止文も1発話文とみなし、1発話文ごとに改行して文字化作業を行う。(2)に示すように、ある発話文に割り込みがある場合は、割り込みの前後を合わせて1発話文とみなし、また、割り込み発話も1発話文とする。1発話文とみなされたもののなかには、倒置の形になっているものもある。

(2) 鈴木1：それからね、

田原1：野党にばかり文句言って、申しわけないんですが、

鈴木2：もう一つね、もっと危険なことがある。

田原2：あ、う、もっとびつとしたこと、言ってくれないと、(…)<sup>3)</sup>

この場合、鈴木1と鈴木2の発話で1発話文、田原1と田原2の発話で1発話文となる。

また、本稿で分析対象とするのは、倒置の発話文は例外として、各発話文の最後に現れる述部の文体である。

### 2.2. 発話文の文体調査

まず、各発話文を、文体の違いを標示する文(標識あり文)<sup>4)</sup>と、標示しない文(標識なし文)とに分ける。標識なし文には、一語文や中止文が含まれる。次に、標識あり文を丁寧体文と普通体文に分類する。ここで注意しなければいけないことは、討論番組であるため、一人の発言が複数の発話文から成り、そのなかには、野田(1998)のいう、「従属文」が含まれているという点である。野田(同書)は、書きことばの談話・文章の構造を調査し、従属節と同じように他の文に従属する「従属文」では普通体が用いられていることを示している。そして、この普通体の使用はポライトネスに関しては中立的であると述べている。つまり、従属文の普通体は、従属節内の述語が通常、普通体で現われるのと同様に、文法上の制約によるものであって、ポライトネスの観点からみた丁寧体に対立するものではないということである。話しことばであっても、討論番

組のような一人の発話者がかなり長い発言を行う場合には、(3)に示すように、従属文に相当する発話が存在する。

(3)津島1：それが、今、今度、逆に公共事業はみんなおかしいと言い出した。

津島2：これは極端ですよ。

津島2の発話における指示詞「これ」は、津島1の発話内容を表わしているという意味で、津島1の発話は津島2の発話に従属している。それは、「それが、今、今度、逆に公共事業はみんなおかしいと言い出したのは極端ですよ。」という名詞節で表現できることから明らかである。したがって、津島1のような従属文の発話は、ポライトネスの標示に関与しないという理由から、調査対象からはずす。

### 3. 結 果

#### 3.1. 討論番組の無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の基本状態 2種類のテレビ討論番組で使用された発話文の文体別発話文数は以下のとおりである。

表1 テレビ討論番組における発話文

		日曜討論		サンデープロジェクト	
標識なし		109	32%	289	38%
標識あり	普通体	18	5%	190	25%
	丁寧体	214	63%	285	37%
分析対象発話文		341	100%	764	100%
従属文		40		47	
発話文合計		381		811	

二つの番組の共通点は、標識なし文の割合である。これは、一人の発言者がある程度まとまった内容のことを述べようとすると、発話文数が多くなり、述部などが省略された発話が生まれるからであると考えられる。

相違点は、丁寧体文の割合である。NHKの「日曜討論」は、総発話文数のなかで丁寧体の発話文数が最も多く、さらに全体の63%を占めることから、この番組談話における無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の基本状態は、丁寧体であるということがわかる。これは、番組のあらたまり度から考えて、当然、日本語母語話者が期待する言語行動であろう。発言の順番も司会者によってかなり厳しく統制されているため、割り込み発言もほとんど見られない。

一方、テレビ朝日の「サンデープロジェクト」は、丁寧体による発話文が占める割合と標識なし文の占める割合との間にあまり差が見られない。標識あり文では、丁寧体の割合のほうが普通体の割合よりも高くなっているが、いずれも50%を超えていない。そこで、「サンデープロジェクト」の談話に焦点をあて、それぞれの発話者における文体の使い分けがどのような効果をもっているのかを、次節で詳しく検討していく。

#### 3.2. 発話者ごとの文体の使い分け

「サンデープロジェクト」において、各発話者がどのような文体で発言を行っているかを番組内の発話順に示したのが、表2である。

表2 各発話者の使用文体

発話者	文体 標識なし	標識あり		分析対象 発話文	従属文	発話文 合計
		普通体	丁寧体			
田原	115 (36%)	119 (37%)	84 (26%)	318	13	331
枝野	29 (41%)	7 (10%)	35 (49%)	71	3	74
池田	33 (34%)	9 (9%)	55 (57%)	97	3	100
鈴木	26 (35%)	21 (28%)	28 (37%)	75	8	83
津島	46 (49%)	26 (28%)	22 (23%)	94	6	100
坂口	14 (47%)	6 (20%)	9 (30%)	29	2	31
石原	10 (22%)	3 (6%)	32 (71%)	45	1	46
保岡	12 (55%)	1 (5%)	9 (41%)	22	0	22

発話者によって、かなり個人差があることがわかる。標識なし文は、ポライトネスに関して中立的であり、各々の発話者の話し方によってかなり使用率が変動すると考えられる。そこで、丁寧体、普通体の使用率の占める割合によって「ディスコース・ポライトネス」のタイプ（以下、「談話タイプ」と呼ぶ。）を次の5種類に分類する。

#### (4) 談話タイプ

丁寧体中心（無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の基本状態が丁寧体）

丁寧体基調

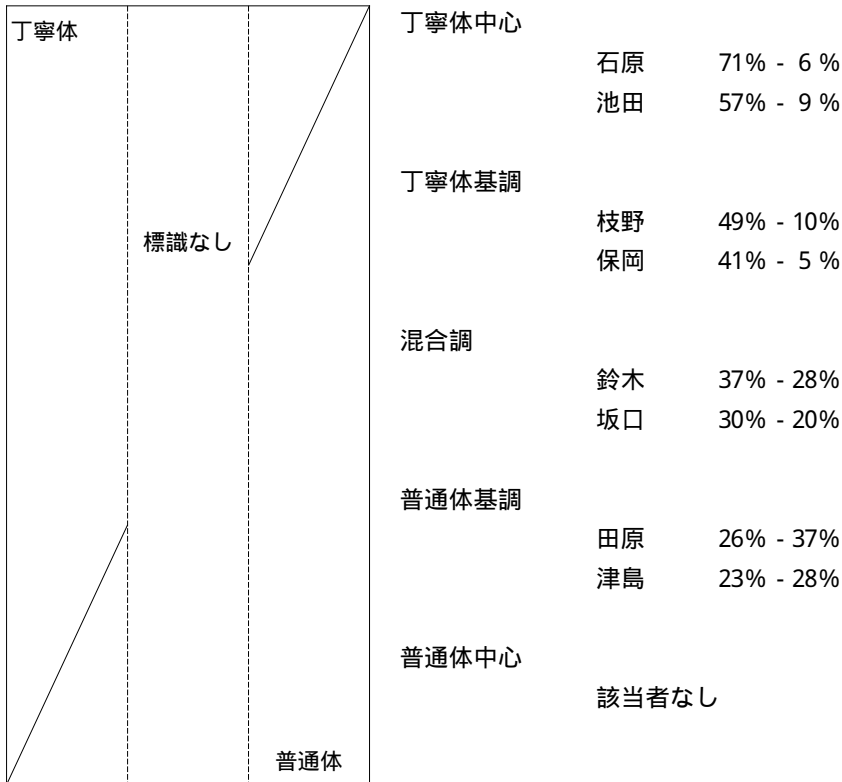
混合調

普通体基調

普通体中心（無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の基本状態が普通体）

談話タイプと各出席者の文体使用状況を図示すると、次のようになる。出席者の左側の数字は丁寧体使用率を、右側の数字は普通体使用率を表す。

図1 各発話者の談話タイプ



### 3.3. 談話タイプの特徴

談話タイプの観点から、各出席者の発話の特徴を順に見ていく。

#### 3.3.1. 丁寧体中心タイプ

このタイプに属するのが石原氏と池田氏である。丁寧体の使用率はそれぞれ71%、57%で50%を超えている。丁寧体が無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の基本状態とみなすことができる。普通体の使用率は、石原氏6%、池田氏9%で、ともに10%以下である。

#### 3.3.2. 丁寧体基調タイプ

枝野氏<sup>6)</sup>と保岡氏の発話がこのタイプである。枝野氏の丁寧体使用率は49%、保岡氏は41%で50%に近い使用率である。普通体の使用率は、枝野氏10%、保岡氏5%で丁寧体中心タイプの二人の発話者と大きな差はない。

#### 3.3.3. 混合調タイプ

標識なし文、普通体、丁寧体の3種類をほぼ3分の1ずつ使用するタイプである。鈴木氏、坂口氏がこのタイプに当たるが、丁寧体と普通体の使用率を比較すると、いずれも丁寧体の使用率が普通体の使用率を上回っている。

### 3.3.4. 普通体基調タイプ

司会者の田原氏<sup>(7)</sup>と津島氏の発話は、普通体の使用率のほうが丁寧体の使用率よりも高い。ただし、津島氏の場合、最も使用率が高いのは標識なし文である。

### 3.3.5. 普通体中心タイプ

無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の基本状態が普通体である発話者はいなかった。

テレビ討論番組というある特定の状況にありながら、出席者によって中心的に用いる文体が異なっている。これは、話し手と聞き手とのあいだに、使用する文体の非対象性があることを示している。その理由については5節で検討する。

## 4. 文体切り替えの効果

前節で「サンデープロジェクト」の出席者のそれぞれの文体使用状況を見た。ここでは、文体の切り替えがどのような状況で起こり、それがどのような効果をもっているかを検討する。

### 4.1. 司会者の場合

司会者の使用率の最も高い文体は、普通体である。司会者はその役割上、発言者の指名等で、標識なし文の使用が他の出席者よりも多くなる。それにもかかわらず、普通体の使用率がわずかではあるが、標識なし文を上回っている。「サンデープロジェクト」の司会者は各々の出席者に発言を求めるとき、どの出席者に対しても基本的に、普通体を用いている。一方、NHKの「日曜討論」では、司会者は基本的に、丁寧体を用いている<sup>(8)</sup>。

(5) <所信表明演説に対する評価を求めて>

田原1：何点ぐらい？

枝野1：ううん、まあ、30点から40点とか、そんなものですね。

田原2：なんで、そんな低いの？

(6) 鈴木1：いつからね、財政赤字の削減に余裕が出たんですよ。

そういう説明をしてくれなきゃ。

田原1：鈴木さんは、鈴木さんは、財政、財革法をまずやり続けろと言うわけ？

(7) 田原1：津島さん、この、小淵さんの何点？

津島1：え、ええ、ま、80点から90点。

田原2：それは高いね。

司会者の丁寧体への切り替えには、無標ポライトネスの場合と有標ポライトネスの場合とがある。無標ポライトネスは、①話題導入・転換の場合、②発言内容を確認する場合、③一般的事柄を説明する場合である。いずれの場合も、番組の出席者に対してだけでなく、広く一般視聴者に向けてのメッセージ発信の場合と考えられる。有標ポライトネスは出席者に対する個人的質問のときに生じている。以下、具体例を示す。

#### ①無標ポライトネスの場合

##### ア．話題導入・転換

同一聞き手内でも、聞き手を変えた場合でも起こる。

(8) 津島1：それと同時に、あのう、消費課税が大きい。

田原1：アメリカは低い。

津島 2 :           アメリカは低い。  
                   日本はその中間。  
                   さ、それをどっちにもってくんですか。  
                   福祉とつなげた場合

田原 2 :           ちょっと、小淵さんはどっちにもってこうしてるんですか。

津島 3 : 私はですね、あの、今までの路線で、え、中間をいきたいと。

(9) 田原 1 : と、それは、やっぱり景気がよくなることになる？

枝野 1 : 基本的には、(中略)もう景気は回復しないと、僕は思っています。

田原 2 : 確かに、日本はね、福祉が低いと思いますよ。

                  そこをどうですか、保岡さん、やっぱりそこるところにバンとお金をもっていくと、景気はよくなりますか。

次は個人的な質問をして、話題転換を行った例である。

(10) 田原 1 : そうするとね、将来は、入り口は今、減税だけれども、出口は増税になるのかどうか、ここをしっかりとしてほしい。

津島 1 : いや、ああ、将来についてもですね、全体として減税にもっていくべきで、(後略)

田原 2 : 津島さん、あと何年ぐらい、議員します？

津島 2 : ま、元気なうち。

田原 3 : 5, 6年、やりますか。

津島 3 : いや、もっとやりたい。

#### イ．発話内容の確認

(11) <相手の発話内容のまとめ>

田原 1 : ちょっと、そこ、聞きたい。

枝野 1 : はい。

(中略)

枝野 2 : 全部合わせた国民負担というのは、今よりは大きくなると思います。

田原 2 : ということは、民主党が政権執ると、つまり、増税になるんですね。

枝野 3 : 今より、あの、将来の、それは、あの、

田原 3 : そうということ、ごまかしちゃ、だめなの。

発展形として、今までの議論内容のまとめが行われることもある。

(12) <議論内容のまとめ>

田原 1 : 石原さん。

                  今の議論にもあったように、野党はだいたいね、公共事業はもう要らないと、こんなものは減らせと、その代わりに減税しなさいと、こういうことですね。

                  石原さん、どうですか。

#### ウ．一般的事柄の説明

(13) 田原 1 : 1) あのを、公共投資の中身の話ですけども、実は、このあいだ、私は北海道でシンポジウムをやったんですが、北海道は今、景気がものすごく悪い。

2) 最大の理由はね、公共投資が今、減ってるからですよ。

3) で、地方へ行くと、地方はだいたい、概ね、景気が悪い。

4) で、どこもヒーヒー言ってます。



5) で、本音はなにかといえば、公共投資が減ってるからですよ。

6) だから、東京はね、みんな、ま、それなりに潤ってるんだけども、地方は公共投資がほしいと。

7) のど、このへんからみんな、言ってますよ。

8) それ、どう思う？鈴木さん。

1), 3) は従属文である。北海道の状況説明は、丁寧体で行い、意見要求は普通体で行っている。

## ②有標ポライトネスの場合

基本状態が普通体であるがゆえに(14)田原1における丁寧体の使用はマイナス・ポライトネス効果を生んでいる。丁寧体の使用が決して丁寧になるわけではない、よい例である。

(14)池田1：あのね、法人税はですね、

田原1：ちょっと失礼ですけど、池田さん、ここに出ていらっしゃるってことは(はい)、当然そういうことはちゃんと詳しく知ってらっしゃるんですね。

池田2：ええ。

池田1の発言をさえぎって、司会者自身も失礼を承知であることを示す前置き表現、尊敬語を使用しての発言である。

## 4.2.出席者の場合

出席者の場合は丁寧体から普通体への切り替えと、普通体から丁寧体への切り替えの場合がある。

### 4.2.1.丁寧体から普通体への切り替え

無標ポライトネスの場合と有標ポライトネスの場合がある。

#### ①無標ポライトネスの場合

丁寧体の使用率が高い石原氏、池田氏、枝野氏の発言のなかで、主張、要求を明確にしたい場合に文体の切り替えが起こっている。

(14)石原1：いじれます。

しくめます。

田原1：(フリップを見ながら)ここは黄色よりも赤が高いということがないようにするわけですね。

石原2：それを努力していこうということが、(...)税制小委員長がおっしゃってる。

石原2の発話は、事実を述べている発話であるが、主張したいことは「税制小委員長がおっしゃっているのだから、黄色よりも赤が高いということのないようにする。」である。

(15)池田1：これはね、これはヨーロッパ型にしていくというのではない。

田原1：いや、だから、

池田2：そういうことではない。

今のあまりにも異常な状態をですね、少なくとも社会保障を増やし、公共事業を減らす、という形で財政構造を変えていきたい。

(16)田原1：それは民主党の政策だよ。

枝野1：はい。

田原2：民主党の政策を自民党におしつけても、それは無理だよ。

枝野2：じゃ、それと違うということであるならば、どこがどう違うのかということを示していただきたい。

枝野2の発話は自民党に対する要求であるが、直接的な聞き手は司会者である。

このような文体の切り替えは、無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の基本状態が丁寧体である「日曜討論」(司会者：影山)でも見られる。

(17) 影山：大臣、これ、現実問題、財源のこと考えますとね、(はい) 来年から一気に2分の1に引き上げると、これ、実際なかなか難しいんじゃないですか。

坂口：1) そうですね、一応、あの、今、お話をございましたように、約束になっておりますから、これ、本来しなきゃいけないわけです。

2) わたくしは、あの、税制改正を伴いましたらできると、思います。

3) だから、ああ、それに見合うべき税制改革ができるかどうかにかかっている。

4) で、最悪の事態ですね、もし、い、来年、税革ができないということになれば、少なくとも2分の1へ来年からスタートすると。

年金の財源問題の解決の鍵は税制改革にあるのだというのが、3)の主張である。

(18) 渡辺：1) しかし、この、今払っている年金保険料を、消費税に換算しますと、13.58ですね、20%の消費税を払っているのと同じなんです。

2) これが20%年金になったら、30%の消費税を、現役世代が払うのと同じだと。

3) このへんをひとつよく考えてもらいたい。

この場合も、直接的な聞き手は司会者である。

## ②有標ポライトネスの場合

自民党に対する批判が、皮肉をこめた形で述べられている。

(19) 田原1：あと、自民党とね、枝野さんから鈴木さんまでは、話し合いや、なんか、うまくいけそうじゃないですか。

(中略)

枝野1：1) 一番問題あるのは、一つは、今日出てこられた三人と、(はい) それから自民党全体の意思とどういうものが、必ずしも一致しているとは、私は思えない。

2) 自民党の場合は、党内でいろいろなことを言ってる人がいても、(...) と言われるだけで、党内で、あの、意見が分かれてる(...)

3) 野党に近い、良識のあるみなさんが、今日、出てきていらっしゃる。

田原2：ああ、今日、野党に近い人が来て(...)

枝野3：(前略) この二つが、決定的に、僕は、あの、問題だと思います。

枝野1-1)の意見表明に続く3)の発話で、相手を評価する表現、尊敬語を交えることによってマイナス・ポライトネス効果を高めている。

## 4.2.2. 普通体から丁寧体への切り替え

普通体基調タイプの津島氏は、党を代表した発言の場合は普通体、一般的事項についての発言は丁寧体で行っている。

(20) 津島：1) 具体的に言うておられるから、われわれは議論しやすい。

2) 例えば、減税でも6兆円であるとね、それから補正予算でも10兆円であるとか、財政法を凍結するとか。

3) それから、あのう、さっきからね、哲学がはっきりしないっておっしゃるんだけど、それじゃ、みなさんがた、哲学がはっきりしてますかと、こう聞きたい。

4) それは、例えばですよ、あのう、財政のあり方について言っても、将来の日本

の国をヨーロッパ型にするか、アメリカ型にするか、これ、大きな問題です。

5)で、これ、税制で議論が出てくると思うんですけど、ヨーロッパと日本とアメリカと比べた場合、どこが一番違うかというと、社会保障負担がヨーロッパはものすごく高いんです。

1)～3)は自民党議員の立場からの発言、4)、5)は一般的事柄の説明である。

## 5. 考 察

「サンデープロジェクト」の出席者の使用文体に見られる個人差は何を表わしているのであろうか。「はじめに」で述べたように、普通体と丁寧体との使い分けは話し手と聞き手との人間関係、発話の内容、状況等によって決まる。この場合、同じ番組に出席しているのであるから、発話内容、状況のあらたまり度は一定である。南(1987)は人間関係を定める条件として、上下関係と親疎関係を挙げている。親疎関係は一般視聴者には判断できない。視聴者が利用できる情報は、年齢と所属政党によって生まれる上下関係である。そこで、年齢と所属政党という二つの要因を3段階に分けて点数化し、それによって上下関係をはかる目安にする。そして、その点数化された上下関係と使用文体との関係を調べる。

年齢は、昭和1桁生まれ、昭和10年代生まれ、昭和30年代生まれに分け、各々に3点、2点、1点を与える。所属政党は与党である自民党3点、野党のなかでも自民党寄りの民主党、自由党、公明党に2点、野党の日本共産党に1点を与える。得点が高いほど上に位置するということである。このように割り出したそれぞれの出席者間の上下関係は以下のとおりである。

表3 発話者間の上下関係

	年齢	所属政党	合計得点
池田	2	1	3
枝野	1	2	3
石原	1	3	4
保岡	2	3	5
鈴木	3	2	5
坂口	3	2	5
津島	3	3	6

図1と表3を合わせて見ると、上下関係においてより上の立場にある出席者ほど普通体をより多く使い、下の出席者は丁寧体をより多く用いるという傾向にあるということがわかる。丁寧体の使用率がもっとも高かったのは合計得点4の石原氏であるが、これは自民党出席者のなかでは一番若いという党内の力関係が影響しているのかもしれない。出席者間の上下関係が発言の使用文体に、ある程度反映されている原因は、司会者が「日曜討論」の司会者とは異なり、どの出席者に対しても普通体基調で発言を引き出しているからであると考えられる。ここに司会者の年齢(昭和9年代生まれ)を加味すると、出席者の心理はよりはっきりするであろう。年下の司会者が普通体で質問してくれば、出席者は当然、それに同調して普通体で答えやすくなる。出席者間の上下関係においても上であれば、普通体使用はより許容されやすくなる。逆に、司会者より年下であれば、丁寧体を選択することになる。出席者間の上下関係が下であれば、その傾向はより強くなる。このように考えると、混合調は、司会者との上下関係、出席者間の上下関係、場のあ

らたまり度とのせめぎ合いの結果、生まれたものだと言えよう。そして、このような状況で丁寧さを積極的に表明しないようにするストラテジーが標識なし文の使用だと考えられる。発話文全体のなかで標識なし文の占める割合がもっとも多かった出席者は、保岡氏、坂口氏、津島氏の三人である。保岡氏は丁寧体を基調にしながら標識なし文を多用し、津島氏は普通体基調で標識なし文を多用した。

次に、文体の切り替えについてである。人間関係を構築するような場ではないため、ほとんどが無標ポライトネスである。そのなかで興味深いのは、丁寧体を中心にした出席者は普通体を用いることによって自己の主張を行い、普通体を中心にした司会者・出席者は丁寧体を用いることによって一般的事柄の説明を行っている点である。これは、どちらの談話タイプであっても、自分が強く主張したいことは普通体で行っているということを示している。この問題に関して、鈴木(1997)は、文体の使い分けは単なる形式上の問題ではなく、そこで語られる内容にも影響を与えると述べている。丁寧体が使われる状況では、話し手は「聞き手の私的領域」に踏み込んだ発言はできないし、また、「話し手の私的領域」に関する発言にも制約があるという。この指摘を討論番組における文体の切り替えに当てはめてみると、丁寧体では一般的な事柄に関する発言は自由にできるが、相手の発言に対する反対意見や要求発言はしにくい。普通体に切り替えれば、発話内容に関する制約が緩やかになり、相手への要求発言<sup>9)</sup>も自分の意見もある程度、自由に述べられると考えられる。そのため、丁寧体で反対意見や要求を述べるには、前置き表現や文末表現(大塚(1999, 2000))を使って相手の「フェイス」への配慮を示すが必要になる。逆に言えば、丁寧体で語られる内容はいわゆるタテマエであって、ホンネではないのかもしれない。司会者の一見失礼であるかのように思われる普通体の使用は、出席者からホンネを引き出すことに一役かっ

## おわりに

本稿では2種類のテレビ討論番組で用いられた発話文の文体調査を行い「ディスコース・ポライトネス」という観点から文体切り替えの効果を考察した。一つの番組では、無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の基本状態は丁寧体で、極めて統制された討論であった。もう一方の番組は、出席者によって使用する文体の割合に違いが見られ、司会者の普通体多用が目立った。出席者間に見られる使用文体の割合の差は、お互いの上下関係を反映しており、文体の切り替えは言語的談話効果を生んでいた。

討論番組では、相手と対立する意見であったとしても自分の意見を述べる事が期待されている状況である。しかし、どのように自分の意見を表明するのか、どのように反対意見を述べるのかは、言語によって異なるであろう。なぜなら、これらの言語行動は相手の「フェイス」を脅かす可能性のある行動であり、それを回避するポライトネス・ストラテジーは言語によって異なると考えられるからである。文化によって異なる、討論におけるポライトネス・ストラテジーの比較は国際社会において極めて重要な問題であり、今後の課題としたい。

## 注

(1) 文体という用語はいろいろな意味で使われるが、ここでは普通体(ダ・デアル体)と丁寧体(デス・マス体)

という speech style の意味で用いる。

- (2) 談話とディスコースは、同じ意味で用いている。
- (3) 文字化資料の発話者の最初の空白部は、直前の発話者の発話と一部重なりがあることを表す。(…)は聞き取り不明であることを、?は上昇イントネーションであることを表す。発話文中の( )は、相槌である。
- (4) 本稿でいう「文」は、断りがない限り、発話文である。
- (5) 資料のなかに、一種の命令表現として「～てください」と「～て」の対立が見られた。前者を丁寧体文、後者を普通体文とみなしている。
- (6) 枝野氏の談話タイプは丁寧体中心タイプに近い。
- (7) 田原氏の発話文のなかに、終助詞的に「でしょ」を用いた例が2例あった。「でしょう」の縮約形と考え、丁寧体文とした。
- (8) NHK「日曜討論」の司会者は番組終了近くになって、普通体で2回質問をしている。
  - a. 高木氏への質問
 

影山：それで、組合の立場からしても、やっぱり、この、全額国庫負担ということを考えておられる以上、やっぱり、この消費税の議論については正面から、する用意はありになる？
  - b. 坂口氏への質問
 

影山：大臣ね、ま、年金改革については(はい)、年末までに、結論を出さなきゃいけないと、いうことなんですけれども、これに向けて、厚生労働省として、あるいは大臣としての案は、いつごろ、こう、お出しになる？

いずれの場合も尊敬語が使われている。
- (9) いずれの番組も要求発言は司会者を介して行われているのであって、直接その相手に行われているのではない。

## 参 考 文 献

- 生田少子(1997)「ポライトネスの理論」『月刊 言語』26巻6号 pp.66-71 大修館書店
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』第662号 pp.27-42 昭和女子大学近代文化研究所
- 宇佐美まゆみ(1997)「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)の開発について」『日本人の談話行動のスク립ト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』文部省科学研究費一般研究(C)研究成果報告書(URL:<http://japanese.human.metro-u.ac.jp/kokubun/mic-J/nihongo/mic-j-kaiwa.html>)
- 宇佐美まゆみ(2001)「談話のポライトネス ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』第7回国立国語研究所国際シンポジウム第4専門部会報告書, pp.9-58 凡人社
- 宇佐美まゆみ(2003)「異文化接触とポライトネス ディスカース・ポライトネス理論の観点から」『国語学』第54巻3号 pp.117-132
- 大塚容子(1999)「テレビ討論における前置き表現 「ポライトネス」の観点から」『岐阜聖徳学園大学紀要』第37集 pp.117-131
- 大塚容子(2000)「テレビ討論における文末表現 「ポライトネス」の観点から」『岐阜聖徳学園大学紀要』第39集 pp.113-125
- 岡本能里子(1997)「教室談話における文体シフトの指標的機能 丁寧体と普通体の使い分け」『日本語学』第16巻第3号 pp.39-51 明治書院
- 国会議員データベース(URL:[http://www.asp-system.com/HP\\_ityokyo/Zgiin\\_2/index.asp](http://www.asp-system.com/HP_ityokyo/Zgiin_2/index.asp))
- 鈴木 睦(1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』pp.45-76 くらしお出版
- 野田尚史(1998)「『ていねいさ』からみた文章・談話の構造」『国語学』194集 pp.89-102
- 南 不二男(1987)『敬語』岩波書店
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C (1987(1978)) *Politeness: Some Universals in Language Usage* (reissued). Cambridge: Cambridge University Press

Usami, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Tokyo: Hituzi Syobo

### 談話資料について

#### 資料Aの討論参加者

[ 司会者 ]

影山日出夫：NHK アナウンサー

[ 出席者 ]

坂口 力：厚生労働大臣

渡辺正太郎：経済同友会副代表幹事・専務理事

高木 剛：連合副会長

高山 憲之：一橋大学教授

西沢和彦：日本総合研究所主任研究員

#### 資料Bの討論参加者

[ 司会者 ]

田原総一郎：ジャーナリスト 昭和9年生まれ

[ 出席者 ]

枝野幸男：民主党衆議院議員 昭和39年生まれ

池田幹幸：日本共産党参議院議員 昭和16年生まれ

鈴木淑夫：自由党衆議院議員 昭和6年生まれ

津島雄二：自民党衆議院議員 昭和5年生まれ

坂口 力：公明党衆議院議員 昭和9年生まれ

保岡興治：自民党衆議院議員 昭和14年生まれ

石原伸晃：自民党衆議院議員 昭和32年生まれ